



略歴

行川 行人（なめかわ こうじん）

昭和十一年二月一日、東京都武蔵野市に生れる。

昭和二十九年、俳句を始める。「かまつか」に入会、

金子麒麟草に師事。現在に至る。

「かまつか」同人。

昭和三十一年、「理大俳句」創刊に参加。

昭和五十八年、現代俳句協会会員。

昭和五十九年、「序曲」に参加、のち退会。

共著『おおいと』（選集）。

現代俳句の展望 56

句集 藍の刻

著者 行川行人

発行 平成十一年二月一日

発行所 現代俳句協会

〒101-0021 東京都千代田区外神田

六・五・四

初冬ふと憎みしものはおのれかも

殿春や掌ふたつ耳ふたつ

桜蒼しというほどのこと俳諧は

円形の時間刻んでいる炎天

黙禱とは耳澄ますこと黄落期

秋蝶のいくつかに逢い逝きしかな

雪山へ天使の沓を履き行けり

ミルク一杯呑みきつて方形の部屋

冬物語始まる婆が木を切つて

曼珠沙華骨の髄から透けてくる

わが胃にも十三夜あり湖北あり

はくれんや耳の奥よりとりだせり

善人にならんならんか秋の暮

冬の川いま水いろとなるところ

梅雨明けまで橋の上から紐たらす

後ずさりで歩めば秋の神に逢う

炎帝にものを預けて去りゆけり

白磁ともちがう死が在り枯野かな

耳底にすすき原あり昏るかな

残像の花火ひだりに男がいて

*